

松王書評に答える

北大の松王さんによる、拙著『ライブニッツの情報物理学』の書評（『科学哲学』51-1、2018、79-83）を拝見した。本書で展開されたわたしのライブニッツ解釈に対する批判は歓迎する。しかし、その批判が誤解や無理解に基づくのであれば、それは「批判」の名に値しない。したがって、以下では、「誤解」や「無理解」に該当するとわたしが判断した箇所を、重要なもののみ指摘しておきたい。

1. モナド界と現象界の峻別、および関係づけ

まず、書評80ページで「本書の解釈の核となる部分」として要約された（2）、

「モナド界で成立することがらと、現象界で成立することがらは、神による『コード化』によって厳密に対応づけられている」

という文章、評者が「厳密に対応づけられている」という表現にどんな意味を込めたのか不明であるが、そのようなことは、著者のわたしは一言も書いていない。拙著35節以下で紹介した『ライブニッツのデモン』（大天使なみの、架空の超能力者）でもないかぎり、有限な知性で見られる（感覚だけでなく知性を介した理論を通じて）現象は、モナド界の状態遷移をたかだか部分的、不完全にしか映していない。すなわち、一対一対応（isomorphism）には程遠い、準同型性（homomorphism、部分的対応）でしかない。それゆえ、「よく基礎づけられた現象」とそうでない現象との区別が生じるのである（ライブニッツ学者にはおなじみの区別）。被造物に備わる感覚能力や知性の高低により、見える現象、推理できる現象などは異なる姿となるが、それがまさにコーディングに依存する。

そこで、評者が「解釈の一番の要と、その難点」と見出しをつけたところに移ろう。ここでの評者の論議は、科学哲学者というよりも「ライブニッツ学者」の観点からのもの。まず、「知覚＝精神の直接的対象」は「疑いの差し挟みよのない議論の大前提ではなかったか」と疑問文で『反論』しようとする。対ロックの議論をモナドロジーにそのまま持って来ることに、わたしは当然賛同できない。モナドロジーで言われるのは「知覚＝モナドの状態」であって、「我々の直接的な認識対象」（書評81ページ、「我々」とは人間のことでしょう、ロックの経験論に合わせて）を語っているのではない。異なる文脈でのライブニッツの発言をすべて同一の文脈において読もうとすると、「見かけの矛盾」が嫌になるほど出てくる。例えば、ライブニッツの時間論が多くの論者（優秀な De Risi も含む）によって酷評されてきたとおりで、わたしはこの事態を避ける方策もはっきりと示した。それが拙著48節の「二重解釈」にほかならない。評者はこれを知ってか知らずか、完全に無視する。

かいつまんでいえば、時間論という限定された文脈においてさえ、ライブニッツは「モナド界での時間の基盤」（これは時間ではない！）と「現象界での時間の特質」を一息で語ってしまうことさえある。これを解きほぐさないと「ライブニッツの時間論」は解読できない。わたしは自分の解読が、おそらく世界初ではないかと自負している。そのカギが、一つの文章のうちに、先に区別したモナド界の条件と、それがコードを介して映される現象界での条件の二種を読み取り、なおかつ二つを関係づけるという「二重解釈」である（詳しくは48～50節）。「知覚」について

も同じ対応ができるはずで、やはりコードがカギとなる、というのがわたしの見解。ちなみに、拙著では、「知覚＝モノダの状態」で通してある。

2. プログラムとコードは不可分

松王書評は、続いてプログラムとコードの関係について、完全な(?)無理解に基づいた批判に走る。評者は、「知覚と現象が分離されれば、神は・・・世界に少なくとも二回介入することになる」と言い、これが(マルブランシュ流の)「機会原因論」を自ら招くことになる、と言う(81ページ)。この言い分に、わたしはわが目を疑った!評者は、「神がまずプログラムを書き、我々被造物が現象を見るためにいちいち神がコーディングを補う」と言いたいらしい。これが「ライブニッツ学者」の言うこととは信じられない。神が世界を設計し創造した際に、プログラムもコーディングもひとまとまりで創造したとライブニッツは主張するに決まっているではないか!チューリングマシンのプログラムでさえ、コード(すなわち、自然数をテープ上でどのように表現するか)を決めなければ書くことさえできない。同様に、全能の神といえども、被造物の基盤となるモノダの状態と状態遷移、そしてその状態遷移が被造物にどのような現象として現れるかを定めるコードなしではプログラムを書くことはできない。そういった創造(一回きり)の諸側面を、一度、二度と数えること自体がナンセンスである。

ここで、評者がせっかく問題提起して与えてくれた機会を活かすため、拙著の本体では省略した細部を補っておきたい。前述の通り、神の創造、プログラミングはワンセットで一度きりだが、モノダやモノダが組織化された神のオートマトン(これが、評者がご執心の「物的実体」の最たるもの)にはグレードがある(例えば、植物、動物、人間、天使など)はずで、わたしの解釈では、グレードによって被造物に見える現象は(同一のモノダ界由来であるにせよ)異なる(つまりコーディングが異なる)はずである。神の設計は、当然、それらすべてを包含するものでなければならない。複数の異なるコーディングは、モノダ界からの、異なる準同型写像

(homomorphism)にほかならない。わかりやすい現代の例を挙げるなら、TVの画像が4Kの8Kのと大騒ぎしているが、高解度画像を受信するためにはチューナーを変えなければならないのと同様である。オリジナルの画像は一つでも、コード経由で受信された画像が、現象としては異なるものであってなんの不思議もない。これが「機会原因論」の導入だというのは、甚だしく的外したイチャモンでしかない。

3. ライブニッツの実在論は『モノの実在』論ではない

最後に、評者とわたしとは理解の仕方が全く異なる「実在」の捉え方が残る。これは「誤解」だと簡単にレッテル貼りはできない。わたしは、当然、自分流の「ライブニッツの実在論」理解がライブニッツの意をくんでいるはずだと主張する。しかし、評者は、書評の最後の方で「モノの実在論」でライブニッツを理解したいことが明白である。そこで、書評のマクラで名前が上がったガーバーを再び持ち出して、「物的実体corporeal substance」の問題がわたしの解釈では置き去りだ、と言いたいらしい。ライブニッツが知的遍歴の過程でこの問題にどれだけ苦労したかをみると訴えているが、それは論理的な反論ではなく「情に訴える」反論でしかない。ガーバーが、ライブニッツはこの問題を解決できなかったというのは勝手である(どうぞ自由に!)。しかし、この問題について、わたしは拙著86ページで、次のように明快な答えを与えている。

彼のアイデアによれば、モナド界と現象界の二つのレベルにまたがり、無時間・無空間のモナドを組織化したオートマトンが、現象界の時空内での動物（自然のオートマトン）をコーディングを経て造り出すことになる。

念のために補足すれば、「自然のオートマトン」とは物的実体の最たるものであるから、わたしは上の簡潔な文で「ライブニッツは物的実体の問題をこのように解決できたはずだ」と答えを与えているのである。この文章を読んだ上で「物的実体の問題が未解決で放置されている」と言いたいのなら、それは、わたしのテキストを誤読したという「最大の誤解」にほかならない。わたしの診断では、その原因は評者が「モノの実在論」にこだわったからであろう。

そもそも、わたしがライブニッツの「情報論的転回」というキャッチフレーズを使ったのは、彼のモナドロジーの実在論が「モノの実在論」ではなく、いわば「情報の実在論」だと言いたいためである。「モナドがモノではないか」という人がいるなら「どんなモノですか？」と問を返したい。モナドの個性を決めるのは、拙著で何度も繰り返したとおり、モナドの「状態遷移関数」（ライブニッツの言葉では「内的力」あるいは「原初的力」）にほかならない。ところが、この遷移関数は「モノ」ではなく「情報」と名づけたほうが適切である。遷移関数以外に怪しげな「モノ」を求めるのは、「モノの実在論」という偏見由来の「ないものねだり」でしかない、というのがわたしの見解。モナドを特徴づける条件が与えられたなら、それ以外のものは不要である。これがわたしのライブニッツ理解である。

文献

松王政浩、書評—内井惣七「ライブニッツの情報物理学—実体と現象をコードでつなぐ」、『科学哲学』51-1、2018

De Risi, V. *Geometry and Monadology*, Birkhäuser, 2007.